No.11／2002.1.1
GRADUATE SCHOOL FOR INTERNATIONAL DEVELOPMENT AND COOPERATION, HIROSHIMA UNIVERSITY
IDEC NEWS LETTER
広島大学大学院国際協力研究科
〒739-8529　広島県東広島市鏡山1-5-1　TEL(0824)24-6905,6906　FAX(0824)24-6904
http://www.idec.hiroshima-u.ac.jp/~info/index-j.html

第12回国際開発学会全国大会報告

開発計画講座　**松岡　俊二**

第12回国際開発学会全国大会は11月30日から12月２日、広島大学東千田キャンパスを主会場に開催された。大会には海外および全国から320名の国際協力に関する専門家が出席し、26セッションの81報告に対して熱心な討議が行われた。

本全国大会開催にあたっては本研究科内会員を中心に大会実行委員会を組織し、私が実行委員長、高橋与志助手が事務局長をつとめた。

国際開発学会は、「国際開発研究の発展と普及を図ると共に開発教育を推進し、もって開発協力に関する国民の理解の増進を図ることを目的」（学会定款第３条）として1990年２月に設立された。初代会長は故大来佐武郎先生、第２代会長は廣野良吉先生、そして本研究科の山下先生が1999年11月より第３代会長をつとめている。現在（2001年12月１日）の会員総数は1,212名で、文字通りわが国の国際開発分野を代表する学会として発展を遂げてきている。

本学会は大学の研究者だけでなく、JBIC、JICAなどのODA実施機関をはじめ開発コンサルタントやNGOなどの実務家も多数参加している。会員の学問分野は経済学、法律学、政治学、社会学、人類学、教育学、工学、農学、医学、地理学、環境科学など極めて学際的な構成となっている（詳しくは学会ホームページ参照。http://wwwsoc.nii.ac.jp/jasid/）。

今回の大会ではプレ企画として、11月30日に「国際環境協力と環境ビジネスの展開」と題する講演会・シンポジウムを広島国際会議場において行い、110名が参加した。基調講演では、村野隆一氏（日本環境コンサルタント会長）が「国際開発援助における民間の役割」について話をした。またパネルでは、荒川博人氏（国際協力銀行）、井村秀文氏（名大）、岸田正之氏（サタケ副社長）および松岡が日本の国際協力と環境ビジネスに関する問題提起を行い、日本における環境ビジネスの振興策も含めた活発な議論が、山下先生の司会のもとに行われた。

本大会のメインであった共通論題は12月１日に「ODA評価の課題」と題して開催され、220名が参加し、会場は超満員の盛況であった。司会は山下先生が行い、基調報告は牟田博光氏（東工大）が「ODA評価の課題と方向」について、また松岡が「ODA評価の課題：専門性と総合性」と題して行った。討論者としては三好皓一氏（JICA）、大金正知氏（国際協力銀行）、佐藤寛氏（アジア経済研究所）がたった。

松岡報告ではODA事業評価に関し４つの提案がなされ、熱心な議論が行われた。（１）ODA評価研究の学術的積み上げを行うための共通の評価フレームとしてDAC５項目を使用する。（２）近年重要視されてきているプログラム評価・政策評価においても、DAC5項目の評価概念を拡張して利用することが可能である。（３）客観的・定量的評価が重要である。（４）学会として独自資金による自主的評価研究を推進するとともに、学会内での評価人材の育成・養成が必要である。

平成13年度公開講座

「ボーダーレス時代の食・農・環境－日本そしてアジアの視点－」

開発技術講座　**熊谷　　元**

大学院国際協力研究科による公開講座が平成13年10月２日から10月30日にかけて、広島市「ひろしま国際センター」で開講された。今回の講座では、国際化時代を迎え、わが国を含めたアジアの国々が抱えた諸問題の中で、特に生活者に身近な食料・農業・環境問題に焦点を絞り議論を進めた。講義は毎週１回計５回開かれた。第１講（熊谷元担当）では、本公開講座の主旨、各講義の概要、講師陣の紹介の後、脱脂粉乳を原因とする食中毒事件、口蹄疫、BSE（狂牛病）等の新しい話題を切り口に、食料・畜産物の生産・流通上の問題を解説した。第２講（中越信和担当）ではアジアの途上国における森林資源の重要性と環境問題を中心に議論し、第３講（井鷺裕司担当）では熱帯林における種の多様性に関する話題を提供した。第４講（前田照夫担当）では内分泌撹乱物質（環境ホルモン）の脅威と遺伝資源保全の重要性を実例を交えて説明し、第５講（中尾敏彦担当）では、自らのインドにおける実務経験を踏まえて開発と文化の２次元から食糧生産問題を解説し、全講を締め括った。

2001年度ユネスコ・アペイド広島国際セミナーを終えて

広島大学アペイド事業実施専門委員会委員長
教育開発講座　**田畑　佳則**

10月23日～30日の日程で、今年度も国際協力研究科をメイン会場に、ユネスコ・アジア太平洋地域教育革新プログラム（Asia-Pacific Programme of Educational Innovation for Development)、略称：アペイド（APEID）の国際セミナーが開催された。本セミナーは広島大学で1987年から続けられており、15年目になる。第６期（1997-2001）のメイン・テーマは「アジア・太平洋地域における21世紀のための教師教育の革新」で、今期最終年のテーマは「教員採用選考方法の改善」であった。

セミナーはバングラデシュ、中国、インド、インドネシア、マレーシア、ネパール、フィリピン、タイ、ベトナムの９カ国の教師教育の専門家を迎えて開催された。まず、教師が置かれている状況や専門的力量の問題、教員選考の状況等について国別報告がなされた後、広島県教委等を訪問し、日本の教員養成、免許、採用の状況について理解を深めた。そして、教員選考のあり方について熱心な討議がなされ、最終日には課題が確認されて幕を閉じた。

シリーズ国際機関⑧

South Asian Association for Regional Cooperation

for, Ahmed Sareer
Director, Information and Media Division
South Asian Association for Regional Cooperation

The South Asian Association for Regional Cooperation (SAARC) was formally established when its charter was adopted on December 8, 1985 by the heads of state or government of Bangladesh, Bhutan, India, Maldives, Nepal, Pakistan and Sri Lanka. SAARC provides a platform for the people of South Asia to work together in a spirit of friendship, trust and understanding and aims to accelerate the process of economic and social development in member states. Regional cooperation is seen as a complement to the bilateral and multilateral relations of its member states. In order to discuss the regional issues and achieve its aims, SAARC holds regular summits, its highest authority, attended by the national leaders. The first SAARC summit was held in Dhaka, Bangladesh in December 1985 and the eleventh, the latest SAARC Summit was just held in Kathmandu, Nepal, January 2002.

The Council of Ministers, comprising foreign ministers of the member states, meets at least twice a year to discuss about the issues of the region. It formulates the policy, reviews progress of regional cooperation, identifies new areas of cooperation, and establishes additional mechanisms that may be necessary to run the SAARC. The Council is supported by the Standing Committee, comprising of foreign secretaries, which monitors and coordinates programs, approves projects, and mobilizes various resources. The SAARC secretary-general is appointed from the member countries on the rotation basis. The current secretary-general is from Bangladesh.

The idea of regional cooperation in South Asia was first mooted in November 1980 and five broad areas of cooperation were identified initially. The areas of cooperation pursued now in SAARC's integrated program of action through technical committees are agriculture and rural development, social development, environment, meteorology and forestry, human resource development, science and technology, transport and communications, and energy. It convenes ministerial level meetings on specialized subject-specific themes such as commerce, international economic issues, housing, tourism, environment, information, women and youth. Some of the important issues SAARC has undertaken are establishment of SAARC preferential trading arrangement (SAPTA) to reduce tariffs and other impediments to the regional trade, initiatives for a free trade area, adoption of conventions on the suppression of

(to be continued on P. 5)

シリーズ研究室紹介⑧
― 上原研究室 ―

文化動態講座　**上原 麻子**

異文化コミュニケーション論は、その生誕の地ともいえる米国でも若い研究領域である。米国では1960年代の市民権運動以降、異人種異民族の接触に関し人々の意識が高まり、70年代の後半には約450の大学で必須科目となり「市民権」を得、現在、約600の大学で教えられている。日本では一層若い学問であるが、80年代より今日に至るまでの「国際化」に伴い、研究および実践の重要性は増すばかりと言えよう。研究の中心は異なる文化を持つ人々の直接接触によって生じる諸現象で、多様であるが、私は近年次のような研究を進めている。

1）異文化コミュニケーション現象の解明
2）途上国からの帰国者（青年海外協力隊員）の日本における適応課題
3）アジアの途上国における女性問題

1）はこの領域が“atheoretical”との批判に対し、私なりに結論を得たく取り組んでいるが、「現実に何が生じているか」を対象に、その説明をしたく試みている。

また、この領域に興味を持ち研究を始める学生にはまず以下のことを教えようとしている。

1）人間が話し合うという現象は身体的相互作用に基づく協同作業であること。（言葉は重要であるが、言葉が話者の意図を伝達するのでなく、それを推し量る単なる手だてである。）
2）それゆえ、異文化コミュニケーションの核は倫理である。（このため、研究室では修士、博士課程を問わず、学生が最初に学ぶことは異文化での研究者としての倫理である。）
3）研究を進めるに「社会的弱者」の視点をもつよう努めること。

現在いる学生にはどういう訳か台湾、大陸からの中国人が８人（博士課程１、修士課程６、研究生１）でマジョリティ、バングラデッシュから１人（博士課程）。中国からの留学生の中には英語を主要言語としたり、茶髪、ミニスカートの者がいたりで、私は大陸中国が確かに変わったことを日常に目の当たりにしている。彼らの来日前に研究室に「二つの中国」ができるのではと懸念したことも杞憂に終わり、授業終了と共に彼らが共通語で和気藹々とやっているのを見ると心が和む。

学生の主な研究課題は、「中国人・日本人留学生の異文化適応」、「台湾の少数民族」、「医者と患者のコミュニケーション」、「広告に反映する文化・ジェンダーの相違」、「バングラデッシュにおける少数民族への偏見」等と多彩である。たった一人いる日本人の修士学生は、ハワイ大学へ留学中。「先住民と多文化社会」で研究を進めつつある。

環境教育ワークショップの開催について

教育開発講座　**平川　幸子**

IDEC教育開発講座では、ACCU（㈶ユネスコ・アジア文化センター）・ユネスコ青年交流信託基金事業の一環として、アジア太平洋地域の教員を対象とする初等教育の環境教育促進ワークショップを2002年２月18日より３月10日まで実施する。ACCUとの委託契約は、2001年11月22日に締結された。NGOの委託事業を経理委任金で実施するのは、IDECにとって始めての試みである。

JICA・サーモンキャンペーン制度

教育文化専攻博士課程後期　**齊藤　一彦**

開発途上国や国際協力についての関心・理解を、より多くの人に促していこうとする「開発教育」は、近年益々盛んになりつつある。その開発教育の一環に、JICAの「サーモンキャンペーン」という制度があることをご存知であろうか。

サーモンキャンペーンとは、青年海外協力隊OBなどが、学校などへ出向き、自らの国際協力体験に基づき、途上国の実情や国際協力の必要性などについて講義をするという制度である。この“サーモン”いう名前には、鮭が生まれた川に戻るように、途上国の現場で国際協力に携わった隊員たちが、出身地域へ戻り自分たちの体験を伝えていこうというメッセージが込められているという。

さて、そのサーモンキャンペーンに、現在、IDECに在学している協力隊OB達が関わっており、JICA中国国際センターから依頼を受けては、広島県内の学校や、市民講座などへ講師として派遣されている。広島県内には数多くの協力隊OBがいるものの、その中でもIDEC内の協力隊OBは国際協力に特に強い関心があることや、院生だけに時間が作りやすいということもあって、JICAからの講師依頼も多いようである。各自、写真、スライド、ビデオ、また民族衣装や現地の料理などを持参しながら、途上国の実情を正しく伝えようと試行錯誤している。

筆者も、これまで十数回、サーモン講師として学校などへ赴いた。子供達に、国際協力について話す際、大学院での講義や議論で使用するような専門用語は使えず、噛み砕いて、分かりやすく説明しなければならない。実はこのことが意外に難しいのである。平たく話すためには、国際協力の本質をしっかりとわかってなければならない。協力隊経験、大学院での勉強を通じて、国際協力や開発途上国の事情について、一応のことは理解していたつもりでも、人前で、しかも子供達を前に話そうとすると、より深い理解が必要であることを痛感させられる。

実はこのサーモンキャンペーン制度は、聴衆者への開発教育効果のみならず、我々協力隊経験者が、国際協力の原点に戻って考えさせられる良い機会でもあるのだということを切に感じている。

IDEC アジアセミナー要旨

The 69th IDEC Asia Seminar

講師：金子洋三（JICA青年海外協力隊事務局長）
演題：青年海外協力隊の過去、現在、未来
日時：2001年７月４日

青年海外協力隊制度は、1960年代後半に実務経験者派遣からはじまり、70年代に、公務員派遣法の制定など、制度面での整備が行なわれ、80年代を通じて国際協力事業が拡大され大量派遣の時代に入った。1990年代は国際協力の潮流は大きく変化し、人間中心の開発が唱えられるようになった。将来の協力隊には、途上国に対する協力はもちろん、帰国後の隊員がその経験を日本の社会に還元していくことが求められている。日本の閉塞した社会状況の中では、協力隊のフロンティアはむしろ日本の中にあるのではないか、と結ばれた。（記録：中山修一）

The 70th IDEC Asia Seminar

Speaker: Fazal-ur-Rahman (Visiting Research Fellow, IDEC, and Senior Research Fellow, Institute of Strategic Studies, Islamabad, Pakistan)
Theme: Japan's Relations with South Asia: A Pakistani Perspective
Date: July 13, 2001

Regional cooperation in South Asia has long been hampered by the strategic factors and Japan's finally entering the scene symbolized by the recent visit of Prime Minister Mori seemed to turn the event. More cooperative relations may be brought about, though Japan's primary interest is in its improved relations with India. (Reporter: Osamu Yoshida)

The 71st IDEC Asia Seminar

Speaker: Victor A. Shnirelman (National Museum of Ethnology and Russian Academy of Science)
Theme: Ideology of Ethnic Feud: Myths of the Past, Religion and Demography as Instigators of the Georgian-Abkhazian Conflict
Date: September 14, 2001

The South Caucasus (Transcaucasus) region is a particularly conflict-prone area in the 1990s after the disintegration of the Soviet Union. Dr. Shnirelman focuses upon one of the conflicts in the region, that is, the Georgian-Abkhazian conflict. The myths of the past golden age such as the ancient Kingdom of Colchis, the religious difference between Christians and Muslims, and the in-migration of the Georgians into the Abkhazian area, all played important roles in fanning the opposition between the two nations. These ideological and demographic factors were resorted to by both sides and contributed to the breakout and the aggravation of the armed conflict. Dr. Shnirelman convincingly showed that ideology creates an ethnic feud and may bring about an armed conflict. (Reporter: Masatsugu Matsuo)

The 72nd IDEC Asia Seminar

講師：黄　　一（大学院国際協力研究科客員教授，大連理工大学教授）
演題：Corrosion and Anticorrosion in Natural Corroding Environment（自然腐食環境における腐食・防食について）
日時：2001年９月26日

The basic theory of corrosion and the currently used methods for corrosion prevention were discussed. Oxygen and water in natural environment such as seawater, soil and atmosphere result in a corroding process of metallic materials, and such a process will be accelerated due to some kinds of corrosion cell such as the oxygen concentration difference cell and the different metallic materials contacting cell. Corrosion results in damnifications in ship hulls, offshore structures and underground pipelines ect., and tremendous economic losing has been being undergone. It is possible to realize the corrosion prevention for ship hulls, offshore structures and underground pipelines ect. by using coatings and cathodic protection jointly, and sacrificial anodes made from aluminium alloy and zinc alloy as well as impressed current have been being currently used for cathodic protection. A reasonable and reliable design of cathodic protection system for a large scale and complicated structure can be achieved on the basis of numerical simulation analysis, and the very large floating airport with the long life (more than 100 years) would come true in near future. (Reporter: Kimio Saito)

The 73rd IDEC Asia Seminar

講師：中村　聡（在ザンビアJICAジュニア専門員）
演題：ザンビアの教育分野における国際協力に関する現状と課題
日時：2001年９月26日

ザンビアに対する教育協力もセクターワイドアプローチ（SWAps）がとられているが、まだ、重点プロジェクトの集合体（SIP）の域を出てはいない。2005年までに初等教育の完全普及を目指す基礎教育分野投資計画（BESSIP）が実施されているが、参画者が多いため意見の統一が難しいという問題とザンビア政府のオーナーシップの形骸化という問題がある。今後、援助の予測性精度を向上させていくための事業評価の強化や、モニタリング手法に関する研究と人材育成が待たれる。（記録：田畑佳則）

The 74th IDEC Asia Seminar

Speaker: Pam Rajput (The director of Women's Centre and a professor in Political Science at Panjab University, India; Visiting professor, IDEC)
Theme: Women's Movement in India: Some Critical Questions
Date: November 2, 2001

The focus of the presentation was placed on the last three decades during which resurgence of the movement was taken place (mid-70s) and it has grown in magnitude and its outreach. Main topics discussed were the problems (internal political and economic situations, physical/mental abuse against women, declining sex-ration, poverty development debates and globalization, fundamentalism etc.), the strategies for equal participation, and the critical challenges the women have been experiencing. (Reporter: Asako Uehara)

The 75th IDEC Asia Seminar

講師：徐　恵卿（韓国全州大学校教授；広島大学客員教授）
演題：韓国の菜食文化について
日時：2001年11月15日

第75回IDECアジアセミナーは、ハングル語（IDEC院生が日本語通訳）でお話をいただいた。韓国における菜食の歴史、穀類・野菜を主材料とする食べ物の紹介、作り方、食べ方、効用の説明は興味ぶかかった。30年前までは菜食は普通だったが、経済発展とともに肉食が増え、健康問題になっているとのことは日本にも当てはまる。菜食が未だに普通であるネパールの小生にもその話は興味深かった。次々とキムチ、チゲ、ナムル等の話が美味しそうなスライドとともに展開され胃が驚いていた人も多かったのでは。（記録：マハラジャン、ケシャブ・ラル）

(from P. 2)
terrorism, narcotic drugs and psychotropic substances, trafficking of women and protection of children.

SAARC promotes cooperation-dialogues with other regional organizations such as Association of South-East Asian Nations and European Commission and works closely with various United Nation`s organizations and other international bodies. Beyond official linkages, SAARC also encourages and facilitates interactions among the private sectors; chambers of commerce and industry, legal communities, professional groups and civil societies of the member states.

The SAARC Secretariat is based in Kathmandu, and coordinates and monitors SAARC activities, services the meetings, and serves as a channel of communication between the SAARC, other regional organizations and inter-government institutions. The building is located in the heart of the city, near the royal palace, ministry of education and Thamel, the tourist area.

The SAARC regional centers relating to tuberculosis, meteorological research, human resource development, agricultural information, and documentation are established in Kathmandu, Dhaka, Islamabad, Dhaka and New Delhi, respectively.

For any enquiries: SAARC Secretariat
P. O. Box 4222　Kathmandu, Nepal
Phone: +977-1-221794 & 221785　Fax: +977-1-227033 & 223991
E-mail: saarc@saarc-sec.org, dirmal@saarc-sec.org
Web:　www.saarc-sec.org

ようこそ IDEC へ

2001年10月入学　博士課程後期
開発科学専攻４名
（内留学生４名）
教育文化専攻５名
（内留学生５名）
博士課程前期
開発科学専攻16名
（内留学生13名）
教育文化専攻７名
（内留学生５名）

客員教授・客員研究員の紹介

[客員教授（外国人研究員）]

氏　　名：金　　昌洙
（Changsoo Kim）
出　身　国：韓国
出身国での所属：釜山大学校・准教授
研　究　題　目：アジアの経済発展過程における日韓協力
滞　在　期　間：平成13年10月１日～平成14年３月31日

氏　　名：Pam Rajput
（パム　ラジプト）
出　身　国：インド
出身国での所属：パンジャブ大学・教授
研　究　題　目：東アジアおよび南アジアにおける女子の比較文化研究
滞　在　期　間：平成13年10月１日～平成13年12月31日

氏　　名：Sukumar Biswas
（シュクマル　ビスワス）
出　身　国：バングラデシュ
出身国での所属：バングラ・アカデミー・副所長
研　究　題　目：日本とバングラデシュにおける国際協力関係の研究
滞　在　期　間：平成14年１月１日～平成14年３月31日

[外国人客員研究員]

氏　　名：朱　　仁傳
（Renchuan Zhu）
出　身　国：中国
出身国での所属：安徽省安徽建築工業学院・講師
研　究　題　目：海水リチウム採取システム技術に関する研究
滞　在　期　間：平成13年10月１日～平成14年９月30日

氏　　名：廖　　静南
（Liao Jing Nan）
出　身　国：中国
出身国での所属：なし
研　究　題　目：日中企業の比較研究
滞　在　期　間：平成13年11月１日～平成14年10月31日

スタッフの人事異動

■転　入　等■

[教　務　員]

H13.９.１　　配置換　　前田直樹

新任スタッフの紹介

[教　務　員]

前田　直樹
2001年広島大学大学院社会科学研究科博士課程後期単位修得退学
三重県出身

修了生の進路

2001年９月　博士課程後期
開発科学専攻６名（内留学生４名）
教育文化専攻１名（内留学生１名）修了

教育・公務	１名
民間企業	０名
進　　学	０名
そ　の　他	６名

2001年９月　博士課程前期
開発科学専攻14名（内留学生12名）
教育文化専攻７名（内留学生６名）修了

教育・公務	５名
民間企業	１名
進　　学	７名
そ　の　他	８名

カレンダー
〈２００２年1月～２００２年6月〉

2002年

１月７日	博士論文提出締切
１月18日	教授会
１月22日	博士候補者試験結果公表
１月31日	修士論文提出締切
２月12日	修士論文発表会
２月14日	博士課程前期第二次募集・後期入試（～15日） 平成13年度第二回総合試験
２月15日	教授会
２月22日	博士課程前期第二次募集・後期　合格発表 平成13年度第二回総合試験　合格発表
３月１日	正教授会，教授会
３月21日	学位記授与式
３月22日	教授会
４月３日	入学式
４月19日	教授会
５月24日	教授会
６月21日	教授会